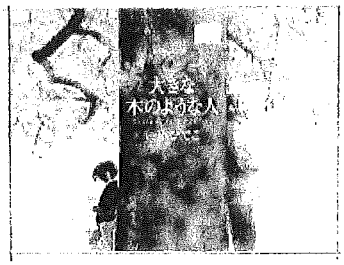
若葉のころに

我が家の庭のルピナスが今、蕾をにゅーっと伸ばしています。ルピナスさんみたいにすくっと生きていきたいと思っています。
今月はしたたる若葉の季節にぴったりの本をえらんでみました。

「大きな木のような人」　いせ　ひでこ（著）講談社　2009

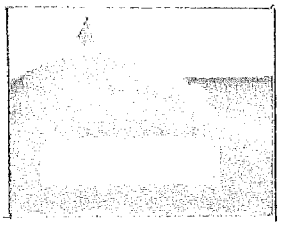


パリには2本の樹齢400年のアカシアがある。
その一本の物語は「ルリユールおじさん」（理論社）にある。
もう一本のはパリの大きな植物園で樹齢を重ねていた。
少女はその植物園で、植物学者と出会い心に何かが芽生えたことを感じる。
たくさんの植物たちと、水彩画のやわらかな色と光。
本の最後に登場した植物の名前もあって、それをたどってもう一度本を繰り直す。
人はみな心の中に一本の木をもっている。
それは「大きな木のような人」二冊続けて読むとサプライズがある。

なのはなみつけた
（かがくのとも傑作集
どきどきしぜん）
ごんもり　なつこ（著）
福音館書店　2009

木はいいなあ
ジャニス=メイ=ユードリイ（著）
マーク=シーモント（イラスト）
さいおんじ　さちこ（翻訳）
偕成社　1976

はちうえはぼくにまかせて
ジーン・ジオン（著）
マーガレット・ブロイ・グレアム（イラスト）
もり　ひさし（翻訳）
ペンギン社　1981



ルピナスさん
―小さなおばあさんの
バーバラ　クー（著）
掛川　恭子（翻訳）
ほるぷ出版　1987

（小林　直子）

かず

「かずに終りはないの？」「かずっていったいどこからくるの？」と祖父に問いかけたのは『1000の星のむこうに』（アネット・ブラ 文・絵 岩波書店2007）のリサ。

子どものこんな素朴な疑問に、大人は的確な答を返すことが出来るのだろうか。数にまつわるたくさんの本の中から紹介します。

（にじのこ文庫　三上啓子）

『かみなりケーキ』

パトリシア・ポラッコ 作　小島希里 訳
あかね書房　1993

毎年ミシガン州を襲う、雷を伴った夏の嵐がやって来た。

ピカッと光った瞬間から雷鳴が轟くまでを数えて、嵐の到着時間を予測するのは、祖母の生活の知恵。「かみなりケーキを焼くコツは、嵐が来る前に、ケーキをオーブンに入れること」

さて、嵐をついて農場を駆け回り準備したケーキのお味は？

雷の擬音語が楽しい。

『かずのうちゅうでだいぼうけん』

マサン&レ・シャプレ 作　石津ちひろ 訳　ほるぷ出版 '97

1日を24時間、1時間を60分、1分を60秒と、6を使って時間を分けたのは、天文学に長じた古代メソポタミア人。大昔から0を使っていたのは、インド人と中国人で、7世紀にアラブがインドを征服してから、たくさんの国に広まったとか。

興味深い数の知識が、子どもたちの好奇心に火を…。

『小町算と布ぬすっと算』

山崎直美 著
さ・えら書房　1988

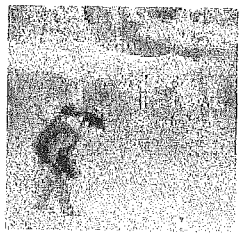
―― わらべうたと物語で つづる たのしい算数 ――

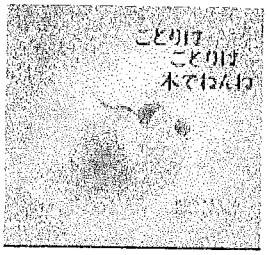
明治時代に西洋の数学が入ってくると、それまでの楽しい工夫をこらした和算の文章問題が、伝わり難くなった。現在も用いられている鶴亀算は、1700年前から口承、後に書き伝えられたという。今、問題とされているゲーム脳の解消に、和算の世界へ誘うのはいかが。

韓国絵本リスト　きんだあらんど評

『かあさんまだかな 』 李泰俊/キム ドンソン/全美恵
フレーベル館 （大型本　2005/10）¥1,260
男の子が一人お母さんの帰りを待っています。ちんちん電車の小さなプラットホームで。描かれている町の人々は、一人ひとりが物語を背負っているような深い表情としぐさをしています。低い男の子の視線で描かれた町。ぶっきらぼうな大人の言葉。でも本当はちゃんと見守っている社会と自然。最後まで問いかけを残す絵画のような絵本。よーく見てください。

『かわべのトンイとスニ』キムジェホン/星アキラ/キムスヨン
小学館 （2007/12）¥1,680
子どものとき、雲を見て驚いたり話しかけたことはありませんか？自然の中で育った感性は、川の岩や石にも心を感じてしまいます。でも、その大切な感性は、豊かな自然と、家族との人間関係、また地域で優しく見守る人々によって育まれる。そんな思いが伝わる絵本。きんだあらんどお薦め。





『ことりはことりは木でねんね』チョンスニ/松谷みよ子
童心社 （大型本　2007/9）￥1,470
子守唄とは、文字や文学に頼らず、だたお母さんが大切な子どものために口に出た言葉にリズムがついたもの。だから、どんな子守唄でも、お母さんの歴史が詰まっています。韓国の質素だけれども、すべてが揃っているあったかい部屋で、若いお母さんが赤ちゃんにかけます。「ねんねんねんねん…」その思いは、詳細に描かれた家の周りに飛び出して、色んなお母さんの思いでと出会っていきます。

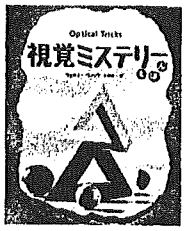
『うしとトッケビ』イサン/韓炳好/大竹聖美
アートン社 （大型本 2004/3）¥1,575
トッケビとは、日本でいう妖怪のような存在です。少しだけ別な能力があって、人間とは別の価値で生きています。でも、どこか親しみがあり、優しい心には、やさしい振る舞いを、人間のよこしまな心には恐ろしい仕打ちを与えます。世界共通な価値を思い出させてくれる絵本。お薦め絵本。

『ソルビム』 ペヒョンジュ/卞記子
セーラー出版 （大型本 2007/1）¥1,575
すべてがあたらしくなるお正月。新しい朝、あたらしい空、新しい雪、でも少女がいちばんすきなのは、自分のためにお母さんが作ってくれたお正月の晴れ着（ソルビム）。少女が髪飾りや靴と一緒にソルビムを身に付けていきます。徐々に整っていく色合いや、影を見ていると、ソルビムを受け継いだお母さんの愛情がエッセンスとなって伝わってきます。

（蓮岡　修）

ミステリー

「視覚ミステリー」



ウォールター・ウィック　作
林田康一　訳
あすなろ書房　1999

「視覚」というミステリー。
３本の丸い柱が一部分を隠すと２本の四角の柱に見えたり。へこんで見えていたものが上下をさかさまにするとでっぱって見えたり。
光や角度を調節し、うまく錯覚が起こるように撮影された写真がいっぱい。観察力をみがくのに良いゲーム本です。

「雪の上のなぞのあしあと」

あべ　弘士・さく
福音館書店　1989

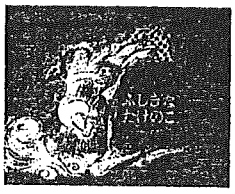
事件は、ある冬の夜、日本で一番寒い所にある動物園でおこりました。冬の間はお休みで、お客さんもいないはずなのに、今までに見たこともない、何かが踏み固めたような雪のあとが、動物園の中をグルグルまわっていたのです。
冬の夜の動物の様子や飼育員さんの仕事が詳しく書かれており、昼とは違う動物園の様子がわかります。

「ふしぎなかけじく」

イ・ヨンギョン　絵と文
おおたけ　きよみ訳　アートン　2004

ある山のふもとに、お父さんを亡くし、目の見えないお母さんとお腹を空かして倒れている男がいました。この男の泣く声を聞いたチョンウチという道士は、かわいそうに思い、男に「かけじく」を渡しました。そのかけじくには、蔵と蔵番が描かれており、蔵番を呼ぶと一日１両もらえるという不思議なかけじくでした。男は、道士との約束どおり、蔵番に一日１両ずつもらいながら、お母さんと幸せに暮らしていました。ところがある日、広い土地が１００両で売りに出ていると耳にした男は、どうしても地主になりたくなり、蔵番に鍵を開けさせ、かけじくに描かれた蔵に入って行くのでした。
韓国の古典小説をもとに創作された、１両の価値がすごく気になる絵本です。

「ふしぎなたけのこ」



松野正子・さく
瀬川康男・え
福音館書店　1963

お母さんからたけのこを掘ってきてといわれた「たろ」。山に入り、たけのこを掘り始めましたが、暑くなってきたので、そばにあったたけのこに上着をかけました。そのとたん、たけのこがぐぐぐっと伸び、上着を取ろうと飛びついた「たろ」も一緒にぐんぐん上へ持ち上げられました。姿の見えなくなった「たろ」を探してお母さん達は・・・。

「ムジナ探偵局」

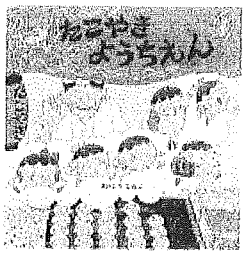
富安陽子・作
おかべ　りか・画
童心社　1999

へんてこ横丁にあるムジナ探偵局には、へんてこな事件ばかりまいこんできます。
ある日、同じ夢ばかり見るという女の人から、夢の中で見た白い箱を見つけたので、箱の中味を調べて欲しいと依頼されるのですが・・・。

（大崎 裕子）

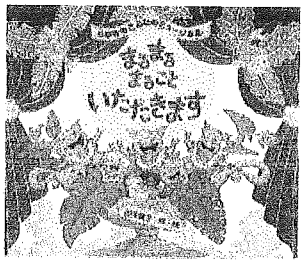
2009.10.2 '09-5
付録

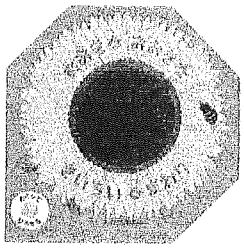
私の好きな絵本



『たこやきようちえん』 さいとうしのぶ作/ポプラ社
たこやきたちが幼稚園に行きたいと言い出し、たこやき幼稚園に行くというお話。目鼻、手、足がついた擬人化したたこやきたちがとても楽しい！ ♪『いきたいな、いきたいな、ようちえんにいきたいな！』と歌いながら読むとなお楽しい。

『まるまるまるごといただきます』 岡本颯子作/ポプラ社
副題に"5ひきのこぶたのミュージカル"とある。あちこちに♪♪がついたせりふが出てくる。そこは当然歌って(適当に節をつけて)ください。そうでないとミュージカルになりませんから。どう歌ってよいかわからない人はこの絵本は使わないこと





『おおきなおおきなきいろいひまわり』 フランセス・バリー作/たにゆき訳/大日本絵画
7角形の絵本。まるいページが順番に出てきて、大きなひまわりの花びらが現れてきます。最後はタイトルの通り、大きなひまわり(直径60cm)になります。感動のラストシーンです

『バスたろう はじめてのうんてん』 のぶみ作/講談社
かんたろうは、お父さんに駅まで傘を届けるために一人でバスに乗って出かけました。ところが乗ったバスがなんだか変。お化けやかいじゅうたちが乗って来たのです。それもみんな子ども。果たしてかんたろうはお父さんが待っている駅まで着けるのでしょうか。聞いている子どもたちもハラハラドキドキ。

『じゃぐちをあけると』 しんぐうすすむ作/福音館書店
じゃぐちをあけるとみずがでる。さわるとチュッ！ たたくとパシャーン！
ページをめくるごとに、じゃぐちから出てくる水の状態が表現されている。この絵本を家で読むときは注意してください。子どもは必ずじゃぐちを開けに行きます。家中が水浸しにならないように気をつけること。

(JPIC 読書アドバイザー 諸岡 弘)

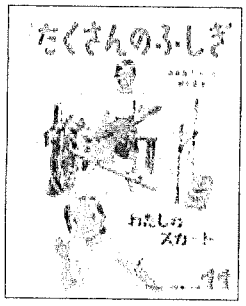
お洒落の秋に読みたい本

『クレメンタインの冬じたく』
ケイト・スポーン作　木坂涼訳　セーラー出版　1995年

着せ替えあそびのような本です。登場するのはお洒落なネコのｸﾚﾒﾝﾀｲﾝ。今年の冬はﾊﾞｯﾁﾘ決めなくっちゃ、というわけで洋服選びを始めます。先ずはｽﾊﾟｯﾂ、ｼﾞｬﾝﾊﾟｰｽｶｰﾄにｾｰﾀｰ、もちろんﾏﾌﾗｰや帽子も忘れません。どのﾍﾟｰｼﾞも洋服屋さんに迷い込んだよう。
あなたもｸﾚﾒﾝﾀｲﾝになったつもりで選んでみては。

『ちょろりんのすてきなセーター』
降矢ななさく・え　福音館書店　1986年

ちょろりんは寒がりやのとかげの子。木枯らしが吹き始めた日に洋品店のｳｨﾝﾄﾞｰで見つけたｾｰﾀｰがほしくてたまりません。春のはらっぱ色のｾｰﾀｰはほかほかと暖かそう。それなのに、お母さんは「とかげの子にｾｰﾀｰなんかいりません」というのです。



『わたしのスカート』（たくさんのふしぎ第236号）
安井清子文・写真　西山晶絵　福音館書店　2004年

ﾗｵｽに住むﾓﾝ族の女性がはくｽｶｰﾄはｶﾗﾌﾙでとても手が込んでいます。しかもそのｽｶｰﾄづくりは、4月に麻の種を蒔くところから始まるのです。紡いで、織って、染めて、ｽｶｰﾄの持ち主になるﾏｲのわくわくする気持ちが伝わってきます。

『ココ・シャネル』　実川元子著　理論社　2000年

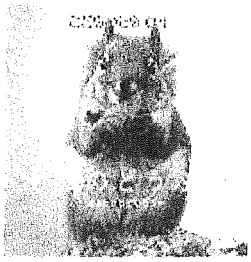
多くの女性が憧れるｼｬﾈﾙのﾌﾞﾗﾝﾄﾞ、その創始者ｺｺ・ｼｬﾈﾙの伝記です。見かけではなく着心地の良さを重視するというのがｼｬﾈﾙのﾎﾟﾘｼｰでした。今の私たちにとって当たり前のことが、当時は画期的なことだったのです。有名な香水ｼｬﾈﾙの5番にしても、そのｼﾝﾌﾟﾙなﾈｰﾐﾝｸﾞも容器も、そして香り自体、とても斬新なものでした。ｼｬﾈﾙはそれに高い値段を付け、ﾌﾞﾗﾝﾄﾞｲﾒｰｼﾞを高めるという商才ももちあわせていました。ただひたすら高い服と思っていたｼｬﾈﾙのｲﾒｰｼﾞが変わる本です。

風の子文庫　土屋佳英子

『わたしのろばベンジャミン』　レナート・オスベック写真　　ハンス・リマー文
松岡享子やく　　こぐま社　　94　1200円

1968年原作のモノクロ写真絵本。幼い女の子スージーと生まれたばかりのロバの子の交遊。舞台は地中海の島です。白っぽい石ころの山を駆けたり、水辺まで言ったり、風景の中にスージーとロバの子を追ってゆくと、はらはらしたり、ほっとしたり。話は単純なのですが、写真だからか、その場に居合わせてみているような気になります。

『もりのどうぶつ』　おおたけひでひろ文・写真　福音館こどものとも０１２　09.12月

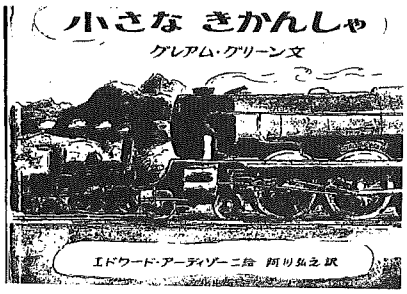


動物たちの表情や姿がよく、展開・文もうまくて、ページをめくるのが楽しみです。北米大陸で自然を撮り続けている写真家だというから、写真のうまさは当然としても、この読みやすさはなぜ？それは「友人の赤ちゃんの瞳を見たとき、撮影したしかの赤ちゃんの瞳を思い出し、この赤ちゃんにどんな世界を見せてあげることができるか、と自分の作品から選んで構成した（さくしゃのことば）からこそでしょう。赤ちゃん絵本を作る基本は、特定のあの子にどう見せよう、という姿勢が必要な気がします。

『ハリネズミと金貨―ロシアのお話』V・オルロフ原作　V・オリシヴァング絵　田中潔　文
偕成社　03　　1400円

ハリネズミのおじいさんが金貨を拾いました。これで冬ごもりのキノコを買って楽をしようか、と思ったら、リスがキノコをくれました。靴を買うことにしようと思ったら、カラスがドングリで靴を作ってくれました。クモが靴下を編んでくれ、クマの子がハチミツを届けてくれ、すっかり冬支度ができたので誰かが使うだろうと金貨はもとのところに。ハリネズミが通ってゆく森や草原、いくらか擬人化された虫や動物の生活がやわらかなタッチで細やかに描かれています。

『小さなきかんしゃ』グレアム・グリーン　エドワード・アーディゾーニ絵　阿川弘之訳
文化出版局　75　　（絶版です。図書館でどうぞ）



イギリスの小さな町の小さな機関庫の小さなきかんしゃが、急行列車の走る広い世界を見たくてどんどん走って冒険に出かけました。「自由だ、自由だ」と叫びながら。アメリカの『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』と筋は似ています。遠くへ行きたい『小さい機関車』のお話は、デンマークにもイブ・スパング・オルセン『はしれちいさいきかんしゃ』があります。私は『ちゅうちゅう』よりもこのグリーンの絵本が好きです。オルセンのも美しい絵本です。　　（個人会員　川端春絵）

ドン・フリーマンの絵本

『くまのコールテンくん』や『ターちゃんとペリカン』の作品でよく知られているドン・フリーマンですが、没後 30 年を過ぎ沢山の絵本が翻訳されています。動物が主人公の絵本をご紹介します。(いずれも BL 出版)

『子リスのアール』やく　やましたはるお

お母さんから自分でドングリをみつけるように言われたアール。人間の友だちジルにもらったものはお母さんの気に入りません。ジルにもらった真っ赤なスカーフを巻いて家を出たアールの体験したことは･･･。健気なアールの冒険に声援を送りたくなりますが、お母さんリスの言動にもニンマリするかもしれません。黒い画面にスカーフの赤が印象的。

『ダッシュだ、フラッシュ！』やく　なかがわちひろ

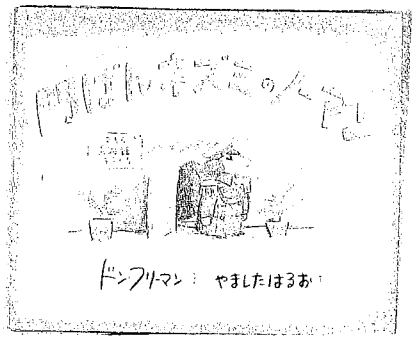
働き者の奥さんのシャッセとぐうたら亭主のフラッシュ。2 匹はダックスフント。

(最初のページの 2 匹の顔を見比べて！)

フラッシュは電報配達の仕事を見つけまじめに働き始めます。そしてフラッシュにも一通の電報が届きます。

犬たちの表情や幸せな結末がほほえましい絵本です。

『門ばんネズミのノーマン』　訳　やましたはるお



ネズミのノーマンは美術館の門番で地下室にしまってある作品を仲間のお客に案内するのが仕事です。ある日、彫刻コンテストが行われることを知ったノーマンはネズミ捕りを使った作品を応募します。

芸術が大好きな小さなネズミの快挙に拍手。

ドン・フリーマンの絵本：滋賀県子ども文庫連絡会学習会

1 月 27 日(水)滋賀県立図書館にて　ぜひご参加ください。

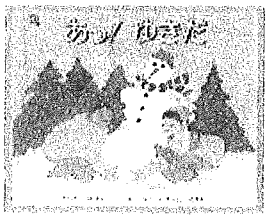
(滋賀県子ども文庫連絡会会員　笹　洋子)

～　雪と氷の国から～

科学読み物研究会　島崎真紀子

「あっ！ゆきだ」

フランクリン・M・フランリー作　ホリー・ケラー絵
高橋康成訳　福音館書店　2008



雪に覆われた明るい森。真っ白で寒いけれど、実は雪があるから植物や動物は凍えないんですって。本当かな、温度計で確かめてみよう。こんな風にお話を楽しむ感覚で雪の環境への影響を科学的に見せる絵本です。雪遊びや雪の結晶の話題では体験にさそう語り口がいいですね。巻末のQ&Aのページでは「ゆきはあめがこおってできるの？」といった素朴な質問にもわかりやすく答えています。

「イグルー」をつくる

ウーリ・ステルツアー写真と文　千葉茂樹訳
あすなろ書房　１９９９

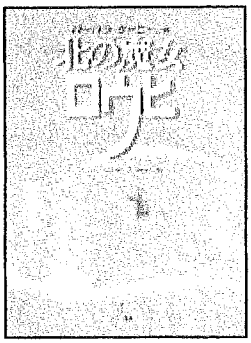
「あっ！ゆきだ」には雪の家の場面があります。この写真絵本はそのイグルーを実際に作る行程を紹介しています。北極地方のイヌイットの父と息子が大きな氷を切り出して、らせんに積み上げていくのです。雪と氷と岩だけの世界で安心して過ごせる家が2,3時間ほどでできるとは！私もまねをして雪遊びで小さいのを作ってみましたが、天井を作るのがむずかしい！そういう体験をすると、よけいにこの絵本のシンプルな道具で作る手順や仕事ぶりに見入ってしまいます。

「ゆきのおしろへ」

シュビレ・フォン・オルファース作　秦理絵子訳
平凡社　２００３

お留守番をしていた女の子が雪の子に誘われて、雪の女王のお城へでかけます。白とブルーを基調とした絵が雪と氷で織り成す世界を見せてくれます。一方、最後に家に帰り着いたとき、お母さんが迎えてくれた、その背景の夕焼けの色も印象的。

「北の魔女ロウヒ」



バーバラ・クーニー絵　トニ・デ・ゲレツ原文
さくまゆみこ訳　あすなろ書房　2003

雪空をスキーで飛んでいるのは北の国の魔女ロウヒです。カンテレという弦楽器の調べに誘われて湖のそばまで来ると、美しい音色に動物ばかりか太陽までが引き寄せられています。ところが月と太陽をロウヒが盗んでしまい…。

フィンランドの民族叙事詩「カレワラ」をもとにした絵本です。

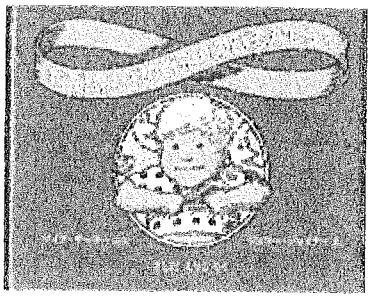
おはなし会でヒットの絵本

子ども文庫やかまし村

「わゴムはどのくらいのびるかしら？」

マイク・サーラー／文 ジェリー・ジョイナー／絵

きしだ えりこ／訳 ほるぷ出版 1976（改訂新版 2000）



ある日、ぼうやは、わゴムがどのくらい伸びるのか試してみることにしました。部屋からそとへ、バスで、汽車で、・・・小学校２年生のクラスで読みました。その晩、担任の先生から電話があり、「保護者からおはなし会で読んでもらった絵本の題名を教えてほしいと問い合わせがあった」とのこと。家に帰ってお母さんにどんなふうにお話ししてくれたのかなぁと、うれしくなりました。（樋口ゆかり）

「ウェン王子とトラ」

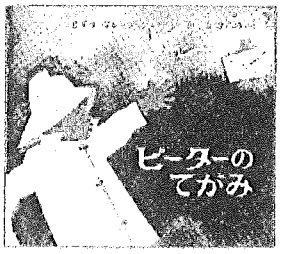
チェン・ジャンホン／作・絵 平岡敦／訳 徳間書店 2007

昔、子を猟師に殺された母トラは、村を襲うようになりました。その怒りを静めるために、ウェン王子が差し出されます。幼い王子にたいし、母トラが取った行動は・・・。迫力のある絵とともに、憎しみも消し去る、人とけものの親子の情愛が描かれています。大人になったウェン王子が取った行為も胸に迫ります。読み聞かせの後、男の子がこの本を手に取り、じっくり見入っていたのが印象的でした。（伊藤康子）

「ピーターのてがみ」

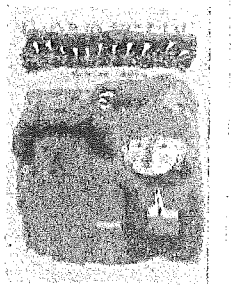
エズラ・ジャック・キーツ／作 木島 始／訳 偕成社 1974

「ピーターのてがみ」



キーツの絵本の魅力をぜひ知ってもらいたくて、７才のピーターの淡い恋心をみずみずしく描いたこの作品を２年生のおはなし会で読んでもらいました。バレンタインデー直後の男の子たち、ピーターに自分を重ねているのか他の絵本の読後とはちょっと違った反応があったそうです。（永井麻里）

「しょうとのおにたいじ」



稲田和子／再話 川端健生／画 福音館書店 2010

広島県に伝わる昔話。鬼に卵を食べられた しょうと（鳥のほおじろのこと）がドングリやハチ・カニたちの加勢を得て仇討ちに。スケールの大きい絵とおおらかな語り口で、子どもたちが大好きな絵本です。１月に待望のハード版が出版。（永井）

先月号に書いていただいた島崎真紀子さんは「京都科学読み物研究会」です。訂正しておわびいたします。1年間いろいろな方に協力いただきありがとうございました。